

西行の心

——身と心の分離という観点から——

木 寺 俊 爾

一 西行研究の問題点

最近の西行熱は驚くばかりで、論文は勿論のこと、マスコミなどでも盛んにとりあげ始めた。人々の価値観が物質から精神に転換しつつあると考えられないこともない。だがどれを見ても、西行の肝心のところが欠けているように思われる。

石田吉貞氏が、「西行の歌の不可解性」(『国語と国文学』昭和三十九年三月号)という論文を公にされてから、もう十数年にもなるうとしている。氏は、現在の西行研究が文学以前または作品の周辺の研究にとどまり、いちばん大切な歌そのものの真の意味を理解することができなくなっていると警告している。氏の説によれば、西行の内部生活を知ることが眼目であり、その心の生活やかなしみに自分をひたらせることがいかに必要であるかが明らかである。この観点からすれば、彼はその生涯一殊に出家以後の生活一において、何を感じ何を考え何を求めていたかを、その作品を通して考察することが研究の要諦であると思われる。彼と同時代の人たちがそうであったように、われわれもまた、西行の心の生活に深く分け入り、彼の悲哀や寂寥や苦惱を追体験することで、歌のもつ真の意味を理解しなければならぬのではなからうか。

ここでは、約二千首ある西行の歌の中から、山家集の雑歌七九四首(八六九首、うち他人の歌七五首)を対象にして、西行の心を生活と関連させながら考察する。特に山家集の中から雑歌を選んだのは、全般に雑歌の性格一述懐歌のような一が強いことと、『西公談抄』にもみえるように、西行自身が雑歌を重視していたところもみられ、現に山家集においても約半数が雑歌で、生活に根ざした独自の歌が中心をなしているからである。

なお、本論文に引用した西行の歌は、伊藤嘉夫註の日本古典全書山家集によった。したがって、用いた歌番号もこれと同じである。

二 西行の心の概観

西行法師ほど、その人生を真剣に生きた人はいない。誠実であつたればこそ苦惱の人であらねばならなかつた。「如何にして己れを知ろうか」という殆んど歌にもならぬ悩みを掲げて西行は登場した(小林秀雄「西行」)というのは、名言である。歴史の歯車が大きく回転し、末世的様相を呈していた平安末期にあつて、自ら描いた人間の生き方を実践躬行するとともに、常に自己を凝視し、心の行方をどこまでも見定めようとした人であつた。

近世の芭蕉は、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」(元禄七年

『爰の小文』という辭世の句を残してこの世を去った。西行もまた晩年に、「風になびく富士のけぶりの空に消えて行方も知らぬわが思ひかな」(二二三八)と詠み、芭蕉と同じ心境を吐露している。両者に共通するものは、心の行方を見定め得ず終焉をむかえた嘆きであり、妄執を断ち切れない赤裸々な人間の姿である。われわれはこのような西行や芭蕉という人間の生きざま、殊に彼らの精神に感動し共感する。古典が現代に生きるのは、その作品の中から作者が姿を現し、その表情や息づかい、手の温もりまでわれわれに伝わってくるべきである。西行の歌は正にそういう歌である。

西行は、保延六年十月十五日、二十三歳で出家した。出家の原因については諸説があるが、その後の彼の生活をたどれば、頼長の『台記』(康治元年三月十五日冬)の記事は信憑性がある。即ち「世俗時入心於仏道」というのが第一の理由である。第二の理由と思われるのは、「憲康の死」(『西行物語』)に見られるような死の思想であろう。これらは共に無常觀に裏打ちされている。第三の理由は、「田仲・荒川兩庄の相論」(『宝簡集』)に見られるごとく、莊園の支配権をめぐる紛争である。このことは、目崎徳衛氏の『西行の思想史的研究』に詳しく、歴史学の側からスポットを当てたものである。

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ(二〇八三)

この歌は出家の直前に詠まれたものである。青年武士佐藤兵衛尉義清の、やや氣負った表現ではあるが、求道への強い決意が読み取れる。この氣持ちの裏側に、現世への堪えがたい思いと、生の究極の

抛りどころである原郷世界(佐藤正英「隱遁の思想」)への希求があると思われる。西行の出家は、目崎徳衛氏の云う「数奇の遁世」などではなく、自己の全きありようを問う行為であった。

このように、西行を西行法師として明確に位置づけるならば、その心の解明は一つの視点を得たことになる。仏道修行者としての生活から生じる「心の叫び」が歌となったといっても過言ではない。「生得の歌人」(『後鳥羽院御口伝』)という評言は、このことをよく表している。西行が歌人である前に僧であらねばならなかった理由もまたここにある。

西行の心を分類考察するにあたり、「身と心の分離」というところに視点を据えた。これはまた、大きく「宗教と文学の背反」という観点にも通ずる考え方である。それは、これまでの「仏道と歌道の融合」という考えを、西行において厳しく否定する。一切を放下しなければならぬ仏道修行者にとって、風雅は妄執以外のなにものでもない。藤原俊成をはじめとする中世の歌人たちが「和歌仏道一如觀」に安坐してようやくその道を全うしたのに比べ、西行はこの面でも大きな苦しみを負って歩かねばならなかった。

まず次の五首の歌を見てみよう。

よし野山こそ糸の花を見し日より心は身にもそはずなりにき(七七)

あくがるるころはさてもやまざくらちりなむのちや身にかへるべき(七八)

はなにそむころのいかでのこりけむ捨ててはてきと思ふ我身に(八七)

さらぬだにうかれてものをおもふ身の心をさそふあきのよの
月(四四五)

うかれいづる心は身にもかなはねばいかなりとてもいかにか

はせむ(九九四)

七七、七八、八七、四四五の四首は四季の歌に分類されている。

ここには、自己の内面を深く見つめる眼があり、身にそわない心をもてあましている作者の曠きがある。花や月にひかれる心も西行法師にとつては、妄執であり放下すべきものであった。九九四の歌は、雑歌の五首述懐の一首で、出家後間もない頃のものと思われる。

「うかれいづる心は身にもかなはねば」という表現の中に、身と心の分離という人間の根源的矛盾が読みとれる。「うかれいづる心」とは、単に漂泊の旅にうかれ出る心というのではなく、西行の中にある煩惱が静まることなく蕩揺し、僧身にはなかなか戻らないことをいっているのである。僧身を離れて、自然(花や月)や人間(人情)や都(体制内世界)にひかれさまよう心を抑えかねている姿に、人間の深い内面の苦悩をみるような気がする。

三 身と心の分類と考察

山家集の雑歌七九四首―他人歌を除く―の中から、「心」とか「身」とかいうことばの詠みこまれている歌一五〇首―「恋百十首」および「百首歌」中の恋十首、また「心ち」「心たくみ」などは除く―を選び出し、次のようにA、B、Cの三種類に分類する。

A―「心」と「身」ということばが共に用いられている歌

B―「心」ということばだけ用いられている歌

C―「身」ということばだけ用いられている歌

A(一二首)

七八一、七九〇、九六一、九六五、九七六、九八六、九九二、

九九四、一〇一〇、一〇二五、一五九五、一六〇三、

B(一〇二首)

七七九、七八四、七八六、七九一、七九四、七九五、七九七、

七九九、八〇一、八〇五、八〇七、八一〇、八二五、八二七、

八四二、八五六、八六一、八六二、八七五、八七八、九〇一、

九一七、九二二、九二七、九三三、九三七、九三八、九四一、

九四二、九四四、九四七、九四八、九五三、九五七、九六二、

九六四、九七〇、九七一、九七二、九七三、九八二、九八三、

九八五、九八八、九八九、九九六、一〇〇九、一〇二〇、一〇

二四、一〇二五、一一一一、一一一七、一一一九、一一二三、

一一二九、一一四六、一一四八、一一五六、一一六五、一一六

八、一一七一、一一七二、一一七五、一一八四、一一〇二、一

二〇四、一一二三、一一二八、一一三四、一一二七、一一三九、

一二五〇、一二五三、一二五四、一二八五、一二八九、一三二

二、一三二七、一四五九、一四九六、一四九九、一五〇〇、一

五〇一、一五〇九、一五二〇、一五二七、一五二〇、一五三五、

一五四〇、一五四一、一五四四、一五四八、一五五八、一七九

八、一五九九、一六一一、一六二四、一六二六、一六三二、一

六三三、一六四〇、一六四一、

C(三六首)

七八七、七九六、八二四、八三二、八三三、八三六、八四五、

八五五、八九〇、九二一、九二八、九三九、九七四、九九〇、
 九九一、一〇六六、一一一四、一一二一、一一二二、一一二四、
 一一二八、一二七四、一二七六、一一九一、一三二七、一四八
 九、一四九八、一五〇二、一五〇八、一五二二、一五七五、一
 五九七、一六〇八、一六一三、一六二九、一六三〇、
 以上のA、B、Cについて考察するにあたり、Aは殊に重要であ
 るので全歌を掲げることとする。

ながらへむとおもふ心ぞつゆもなきいとふにだにもたへぬ深身
 は(七八一)
 さてもあらじいま見よ心思ひとりて我が身は身かともうかれ
 む(七九〇)
 こりもせずき世のやみにまがふかな身をおもはぬは心なりけ
 り(九六一)
 いさぎよきたまを心にみがき出でていはけなき身にさとりをぞ
 えし(九六五)
 なにごともむなしきのりの心にてつみある身とはつゆもおもは
 じ(九七六)
 いかでわれきよくもらぬ身になりて心の月のかけをみがかむ
 (九八六)
 身のうさのかくれがにせむ山ざとは心ありてぞすむべかりける
 (九九二)
 うかれいづる心は身にもかなはねばいかなりとてもいかにかは
 せむ(九九四)
 かへれども人のなさげにしたはれて心は身にもそはずなりぬる

歌番号	道	心	僧	身	俗	身	俗	念
七八一		ながらへむと おもふ心(なし)	浮	身		身		心
七九〇		心思ひとり	わが	身		身		
九六一			身					
九六五		たまを心に みがき出で	いはけなき身					
九七六		のりの心	つみある身					
九八六		心の月	きよくも らぬ身					
九九二		心あり	身のうさ					
九九四			身					
一〇一〇			身					うかれいづる心
一二〇五		心すむ	身					心
一五九五		こころ						
一六〇三			およばぬ身			身		ふりにける心

(一〇一〇)
 身につもることほのつみもあらはれて心すみぬるみかさねのた
 き(一二〇五)
 山ふかくころはかねておくりてき身こそうき世をいでやらね
 ども(一五九五)
 ふりにける心こそなほあはれなれおよばぬ身にも世をおもはず
 る(一六〇三)
 これらについて更に次のように分類する。

この表を見ると、七八一、九六五、九七六、九八六、九九二、一二〇五の六首は、心身合一していて法師としてのあるべき姿を示している。七八一の歌では「浮身」となっているが、「うき身」とすべきであろう。この世を「憂き世」となし、わが身を「憂き身」と思い、来世を願う西行の姿がある。現世を離脱することは、仏道修行者にとって第一条件であった。九六五は、法華経二十八品中の第十二品提婆品を詠んだものである。九八六の「心の月」とは「真如の月」のことで、煩惱に覆われて汚されている「自性清浄心」をみかくことである。ここには求道への強い決意が述べられている。草庵生活には、『草庵文学論』（石田吉貞『解釈と鑑賞』昭和三十年十一月号）で詳しく述べられているように、深い哀愁・寂寥・孤独が渠くついていた。道心がなければ住める所ではなかった。西行の生涯の大部分は草庵生活であったが、この厳しさの中にこそ彼の内部生活を構築する強い力があつたと思われる。一二〇五の歌の詞書を見ると、この一首は大峰入りをした西行が三重の滝（那智の滝）をおがんだ時に詠んだ歌とされている。『古今著聞集』（巻二）に従えば、この大峰入りは宗南坊僧都行宗にきびしく鍛えられ、修行僧としての自立に大いに役立ったと思われる。「身につもることばのみ」とは、三業の罪の内でも口の罪業を意味する。和歌もまた仏道の罪障であり、狂言綺語とみなされていた。当時和歌を狂言綺語とする立場は僧侶（官僧）の立場であり、和歌仏道一如の立場は専門歌人のそれであつたと考えられるが、このどちらにも属さない西行が、仏道修行を深める中で、歌を詠むことに多少のうしろめたさを感じていたのではなからうか。

七九〇と一五九五の二首には、出家前の身（俗身）が詠まれている。七九〇の「わが身」は僧身である。ここでは「身」もまた分離している。一五九五の歌は在俗の頃のものであるかと思われるから、「身」とは「俗身」である。左兵衛尉義清の心は既に隨道者の心になつていたのであろう。草庵生活の寂寥をまだ知らない西行の暢びやかなあこがれがそこにある。

九六一、九九四、一〇一〇、一六〇三の四首は、「僧身」と「俗念」という対立と矛盾の相を表している。「身」と「心」の分離がはっきりとみられるからである。九六一の歌は、法華経第二品方便品の深著五欲の文を詠んだもので、一首における「心」とは、五欲（色・声・香・味・触）にまよう心をさしている。罪業の淵から身を救えるのは心より外にないと承知していながら、解脱できない自分をじつと見据えている人間の苦悩がにじみ出ている。九九四は、五首述懐のうちの一首で、出家後間もない頃の歌と思われる。仏道に対する新鮮な気持ちが表示されるとともに、僧身を離れてうかれいづる心をどうしようかという大問題を、このとき既に抱えていたことを物語っている。『般若経』に、「すべての存在は、心をその善き導き手とする。もし心を知ることができれば、あらゆる存在を知り尽くすことができる。この世における種々の存在は、すべて心に由来する。」とある。「心を知る」ことがいかに大切かを語っている。「如実知自心」という良寛のことばも、求道生活の要を言いついているといえる。一〇一〇の歌は、その詞書によると、風邪を患つて京から山寺へ帰ったところ、都の人たちが見舞に来てくれた時に詠んだもので、出離の身でありながらなお人情にひかれる人間

の弱さが実感として述べられている。断ち難いのは俗縁である。一六〇三の一首も「述懐」の詞書があり、前記の一五九五の歌と共に出家前後の心境を述べたものである。「ふりにける心」とは、昔の心つまり在俗時の心で、これには多分に政治的関心も含まれているだろう。出家後しばらくは、東山・嵯峨・小倉などの洛外の山家に住み、都の圈内にあったので、世事からなお避ざかることができなかったようだ。鳥羽上皇落飾、崇徳天皇讓位、近衛天皇即位、美福門院立后、待賢門院出家と続く変事は、徳大寺家に契りのある身であり重代の勇士という家系からして、西行の心をとらえるには十分であった。出家の身でありながらこの濁世の現実を看過できなかつたであろう。その後数年にして西行は生活の中心を高野に移すが、これは都離れぬ我身に訣別して、道心堅固な真言僧をめざしたものと思われる。その時の西行にとって完全な出離は、都から遠い高野に入山する以外なかつた。

以上、Aに類別した十二首について考察を加え、「身と心の分離」ということの基本的な問題にふれた。断ち難い現世への執着と闘い続け、僧と俗の間で激しく揺れ動く人間西行を半僧半俗ということばで呼ぶとすれば、そのことばの中に、慈母のような高僧でもなく、俊成のような専門歌人でもない、彼独自の立場がいぶし銀のように浮かびあがってくる。

次にBに分類した一〇〇首について考察してみる。Bは「心」ということばが用いられている歌を選び出したもので、これを二種の「心」に類別する。

①求道心(四四首)

- 心 七九一、八〇五、八二五、八七五、九〇一、九四二、九四七、九四八、九五七、一〇二四、一〇三五、一一二三、一一二九、一一七五、一五二〇、一六一一、
 - 心すむ 九七二、一二三九、一四五九、一五三五、
 - 心そむ 一二〇二、一六三三、○そらになる心 七八六、
 - 心の月 八〇一、○心あり 八一〇、○心の色 八五六、
 - おどろかむとおもふ心 九一七、○ねがふ心 九二三、
 - 心行く 九三三、○にしをまつ心 九四一、
 - ちりもなき心 九五三、○きよき心 九六四、
 - さとりえし心 九七一、○さとりもとむる心 九八三、
 - 心のみづ 九九六、○心のそこ 一〇二〇、一五一七、
 - 心もちらで 一一二三、○心のそらになる 一一七一、
 - 心しむ 一二一八、
 - 心をかけむ 一三一二、○心のおく 一三二七、
 - すてしおりの心 一五〇九、○たな心 一六三二、
- (イ)俗念(五六首)
- 心 一〇〇九、一一四六、一一七二、一二五四、一五〇二、一五五八、一五九九、○人の心 八六二、一二〇四、
 - うき世をしらぬ心 七七九、○心のねなき 七八四、
 - 心かよふ 七九五、○なにごとにとまる心 七九七、
 - おどろかぬ心 七九九、○よをすてぬ心 八〇七、
 - おどろかぬわが心 八二七、○道をへだつる心 八四二、
 - なきをおくりてかへる心 八六一、○心みだる 八七八、
 - またぬ心 九二七、○うたがふ心 九三七、

○なににつくともなき心 九三八、○心にいらぬ 九四四、
 ○さとりうべくもなかりつる心 九四七、○心かけず 九六二、
 ○くらきにまよふ心 九七〇、○心にかかる雲 九七三、
 ○いかりをのみもむすぶ心 九八二、○にごりたる心 九八五、
 ○おろかなる心 九八八、○のちの世しらぬ人の心 九八九、
 ○しづむ心 一一一、○山めぐりする心 一一七、
 ○つみけむ人の心 一一九、○心にかかる 一一四八、
 ○むかしの心 一二五、○心かよう 一一六五、
 ○浮かるる心 一一六八、○かへりゆく人の心 一一八四、
 ○かよふ心 一二二四、○まどふ心 一二二七、
 ○つらき心 一二五〇、○心にあはぬ 一二八五、
 ○何心なく 一二八九、○心の雲 一四九六、
 ○よわし心 一四九九、○さし出でられぬ心 一五〇〇、
 ○おもへこころ 一五一〇、○ならべける心 一五四一、
 ○とめし心 一五四四、○人をあらそふ心 一五四八、
 ○まどひてし心 一六二四、○わがたてつるとおもひける人の
 心 一六二五、
 ○末の世の人の心 一六二六、○心の夢 一六四〇、
 ○心うかれいづ 一六四一、
 西行の心を、(1)求道心、(2)俗念、のように分類するのはやや強引か
 もしれない。しかし、このように類別することで、いままで分かり
 にくかった西行の心がある程度鮮明に浮びあがってくる。(1)の求道
 心は、「心すむ」の語に集約される。常住真実なるものを求め、自性
 清浄心を磨き出そうとしているからである。「すむ」に「澄む」と

「住む(仏が)」とをかけているが、草庵生活も旅も心すまますための
 の道場であったのだ。西行の仏道修行は雑修であったとされている
 が、醍醐理性院の流れをくむ真言僧であったことは、約三十年間に
 もわたる高野山中心時代からもうかがえる。真言宗の相空海は、大
 日経住心品に依って「十住心」を立てた。これは宗教意識の発達過
 程を十種の形式に分類したもので、真言密教の住心は第十番目の秘
 密莊嚴心にあると説いている。西行はこのうちのどこまで到達した
 僧であったか詳らかではないが、「死出の山路のしるべともなれ」
 (八一八)のように、待賢門院の女房たちからは導師として頼りに
 されていたようだ。

真言僧西行法師が歌人という側面を持っていたことについて、宗
 教の側からどう説明されるかという、密教でいう「三密」によっ
 て明らかにすることができ。三密とは秘密の三業という意味で、
 身密・語密・意密を立てる。ここにいる語密が西行の場合和歌であ
 ったと考えられる。和歌を真言陀羅尼とする思想は、「沙石集」
 (巻五の下)の慈円との話や、「明恵上人伝」の歌話の中でも裏付
 けられる。それ故西行の場合は、作歌という語はあてはまらないの
 であって、歌はすべて秘密の真言であった。

(4)の俗念とは、一切の妄念をさす。その中には風雅心や恋心さえ
 含む。「おどろかぬ心」、「とまる心」、「世をすてぬ心」、「くらきに
 まよふ心」、「浮かるる心」などすべて「にごりたる心」に集約でき
 る。求道心に対照する俗念、むしろ人間的な心といってよい。花や
 月への愛着、異性や友に対する懐きは、人間感情の根本でもあ
 る。当時の禁欲主義的仏教思想が人間性を抑圧していたことは確か

である。自力の聖道門から他力の浄土門への移行が西行の中で行われていたということは、仏教史の上でも見逃してはならない歴史的事実であった。否定して否定し得ないものを西行は逆に楽しんでいたのであるまいか。

次に、Cに分類された三十六首について考察してみる。ここでは「身」ということが用いられている歌を類別することにする。

。身 八四五、九一一、九三九、一〇六六、一一一四、一一二

一、一一二四、一一二八、一一七四、一一七六、一五九七、

一六二九、一六三〇、

。わが身 八三三、八三六、九七四、一五七五、

。いかになり行くわが身 七九六、。たのみもなきは我が身

八三三、

。むかしながら我が身 八五五、。思ひ出もなき我が身 一一

九一、

。みやこはなれぬ我がみ 一五〇八、

。とまるひかりを待つわが身 一六〇八、。かずならぬ身 七

八七、

。世のはかなさをおもふ身 八二四、。すゑの露の身 八九〇、

。のりにはあはぬ身 九二八、。身のうさ 九九〇、

。身をかくす 九九一、。やがていでじとおもふ身 一一二二、

。ありあふ身 一三一七、。白波をかづきはてたる身 一四八

九、

。身にうれへなき 人 一四九八、。うき身 一五〇二、

。ただあらるればあられる身 一五一二、

。おろかなる身 一六一三、

身は心を容れる器である。心が千々に乱れば、器もまた乖離せざるを得ない。「かずならぬ身」、「うき身」、「おろかなる身」は単なる謙遜ではない。自己凝視の中で生まれる自己洞察であり、自己批判である。それは、「むかしながらの我が身」、「思ひ出もなき我が身」、「みやこはなれぬ我が身」へとつながり、「ただあらるればあられる身」に帰結する。出家などせず凡俗の身であれば、こんなに苦しむこともなかったであろうと逆説的表現をとりながらも、善悪を分別せずにはいられない自分をそこにみている。求道心と僧身との統一体としての自己は、西行にとって最初から実現可能なものではなかった。仏教教団に属するでもなく、僧官僧位を求めずを堅持し続けたのが西行であったといえる。律令体制内世界において凡卑な存在でしかなかった佐藤義清は、辺境世界（佐藤正英『隠遁の思想―西行をめぐる―』）に身を置くことによって、己を高く持し、俗世からの十全かつ純粹な離脱をはかり、生の究極の拠りどころを求めようとして苦闘を続けた誠実な人間であった。「いかになりゆくわが身」は、「いかにかずべき我がころ」とともに、西行の内部生活を貫く太い柱であった。尚、ここで対象外とした「心ち十一首も心の考察に参考となるので番号だけをあげておく。

八二九、八七三、八八〇、八八一、九一八、九一九、九九八、一〇五四、一一五五、一二四八、一三〇六、

四 結 語

西行の心を考察するにあたり、山家集の雑歌をもとに「身と心の分離」という観点に立って分析してきた。この観点と方法の妥当性はまだ未知数である。ただ私がいままで山家集を読むことによつて得た感触からすると、この新しい観点もそんなに不合理なものではないということである。西行から伝説のペールを剣ぎとり、人間西行に対面するためには、残された約二千首の歌の林に分け入り、隠し絵のように姿を隠している西行を見つけ出す以外にない。石田吉貞氏が不可解だとしたのは、西行の心の不可解さであった。たとえば、出家の動機からしてまだ深い謎につつまれているのである。七十三年の生涯において、西行が何を感じ何を考え何を求めていたかを知ることが、困難な作業にちがいない。ただ有難いことには、彼が僧としての道を歩んだために、一つの視点を与えられたことである。それは、仏教的世界観（無常観）であり、それから導き出される死の思想である。出離して草庵を結び、行脚して死と対峙し、月花を惜しみて後世菩提を願うことは、当時の仏道修行の眼目であった。おそらく草庵生活も旅も、予想以上に厳しいものであったろう。高さ・清らかさ以上に深い寂寥や孤独が果くつていたのである。その中で西行もまた、常に「捨てしをりの心」に回帰し、自己を励ますにはいられなかった。彼の歌は、こうした遁世生活のうめきにも似た叫びであるということが出来る。この叫びの中から西行の心の痛みを知り、その痛みを共にすることによつて、その人と作品に迫ることが出来るのではなからうか。

私のこの小論は、まだ緒についたばかりである。西行という偉大な人物―強力な実践者―の内面は、ちょうど月の裏面のごとく知る

ことが難しい。だが僅かに光の当たっている部分を注意深く観察し分析することによつて、隠された全体を明らかにすることも可能である。必要なのは方法論である。新しい観点からの新しい研究方法は、単に国文学の側からだけではなく、歴史学・宗教学・美学というような広汎な学問の成果の上に立ち立てられなければならない。そしてより大切なことは、西行の生き方に魅せられた者が地道な研究を続ける中で相互に深め合うことではないだろうか。以上

参考文献（論文中に書名を掲げたものは除く）

- 西行の研究 窪田章一郎 東京堂
- 山家集全注解 渡部 保 風間書房
- 中世日本の思想と文芸 井手 恒雄 世界書院
- 西 行 安田 章生 弥生書房
- 西 行 川田 順 創元社
- 西行法師評伝 尾山篤二郎 改造社

（和歌山県立日高高等学校教諭）